

～絵本によるまちづくりの実践～

心と地域をはぐくむ 図書館活動

和歌山県有田川町

図書館とは、「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」（「図書館法」第2条）である。本を貸し出す場所、ものを調べる場所というイメージが強い図書館に、近年、地域活性化の核拠点としての可能性を見出す動きが見られるようになってきた。カフェのある図書館として、地域住民の交流拠点となり、来館者数を大幅に増やし、まちづくりの核にまで昇華させた“有田川町地域交流センター（ALEC）”はその先進モデルケースである。



「こしだミカライブペインティング」見事にペイント完成

● ボランティア活動と絵本作家との 出会い

一面のみかん畑を真っ直ぐに突っ切る一本道——有田鉄道の線路跡（愛称“ポッポみち”）である。その道のかたわらに旧御霊駅ごりょうの小さな駅舎がたたずむ。そこには、陽に照らされた駅舎の白壁に向かい絵筆をふるう一人の女性を、興味深く見つめる子どもたちの姿があった。有田川町地域交流センター（ALEC）が主催する「こしだミカ ライブペインティング」のイベントである。色とりどりのペンキや筆を前に、こしださんをフォローしているスタッフはセンターの職員だ。

駅舎の壁には、10名以上の絵本作家の作品が描かれている。みかんがたわわに実る風景にカラフルな絵が鮮やかに映える。「作家のみなさんには、町内のさまざまな場所で絵を描いてもらい、ワークショップやフリートークにもご協力いただいています。今はコロナ禍で、室内のイベントが開催できないので、屋外でのイベントのみ開催しています」と説明してくれたのは、センター長の杉本和子さん。旧金屋町の図書室の司書となり、利用者の少なかった図書室に一人でも多くの住民に足を運んでもらおうと、平成12年に絵本の読み聞かせ講座を受講し、図書室で読み聞かせのボランティア活動を開始した。「一緒に講座を受けた方々に『図書館で、絵本の読み聞かせをやっていただけませんか』とお話したら、皆さん『やりたい』と言ってきて、ボランティアでの活動が始まりました。あのときは、まちを思う



読み聞かせボランティア「おはなしサークルつくしんぼ」メンバーのみなさん。

方たちが、身近にこんなにたくさんいらっしゃったということに感動しました」。仲間との出会いやつながりを手繰っていく中で出会った絵本作家の協力を得ながら、イベントを企画することができるようになったという。

現在の有田川町の絵本によるまちづくりの源には、子どもたちに本を読む喜びを伝え、夢を抱いてほしいと願う多くのボランティア住民の切なる思いがあった。

● 「有田川ライブラリー」の誕生

旧金屋町の読書活動は、3町合併後、平成21年4月の「有田川町地域交流センター（ALEC）」の完成によって大きく前進した。旧吉備町では、合併前に実施した町民アンケートの最上位の要望に「図書館建設」が挙げられ、図書館構想の検討が開始されていたが、合併後、その動きは



1

2



1 ポップみちと旧御霊駅。ポップみちは、平成14年に廃線となった有田鉄道線の跡地を整備した全長5.2kmの歩行者・自転車専用道路。ALECもポップみち沿いに建てられている。
2 ライブペインティングがスタート。3 地域交流センター（ALEC）はみかん畑の一角に建てられた町のランドマーク。

有田川町 人口26,164人、世帯数10,630戸（令和2年9月末現在）

和歌山県のほぼ中央に位置し、平成18年、吉備町・金屋町・清水町の3町が合併して誕生した。町の中央に高野山を源とする有田川が流れ、明恵上人、連歌師・宗祇を生んだと伝わる歴史豊かな土地柄である。温暖な気候で、有田みかんをはじめとした柑橘類の栽培が盛んである。豊かな自然環境と経済を両立させるエコなまちづくりにも積極的に取り組んでいる。

加速した。それは、地域住民の憩いの場となる地域交流センターを建設し、その中に本に身近に接してもらうための図書館機能をもたせるというものであった。併設されたカフェや、オープンテラスでも図書館の本が読めるよう、盗難防止ゲートは設置せず、町民ありきの運営体制を敷いた。その結果、有田川町の図書館は、平日でも老若男女が数多く集い、静かな環境の中で本を楽しみ、交流を深める空間となったのである。

当時の様子を杉本さんに聞くと、「建物等のハードの作業を優先し、本の選書や発注、図書館システムの導入にかかる時間がないことや、正規職員で司書は私一人でしたので、開館1年前からたいへんな業務が続きました。でも、専門書ではなく、一般図書や雑誌類、漫画など比較的手に取りやすい本を置くことで、誰もが気軽に楽しめる、地域住民の求める図書館になったと思います。それまで図書館を利用しなかった人たちも訪れてきています。ただ、書庫スペースがないので、せっかくの図書もリサイクルせざるをえないのが難ですね」とのこと。

町のランドマークともなるカフェのある図書館「ALEC」、児童書と遊び場のある「金屋図書館」、豊かな自然に囲まれた「しみず図書室」、そして平成23年にはJR藤並駅に「ちいさな駅美術館 Ponte del Sogno」が整備され、「有田川ライブラリー」が完成した。加えて、絵本を身近に感じられるよう、公共スペースの5カ所にポッポ絵本館などの「まちかど絵本館」、町内のカフェや美容

室などには「まちかど絵本箱」を設置している。

ALEC ができたことで、大規模なイベント開催も可能になった。毎年秋に行われる「えほん de わっしょい」は、絵本が日常になる一日をコンセプトに、絵本作家によるトークやワークショップが行われ、多くの人々が賑わっている。また、平成23年には、「有田川町絵本コンクール」をスタートさせた。審査員は杉本さんがこれまでに出会った絵本作家や編集者で、年を追うごとに、絵本作家を目指す人や出版業界に認知されるようになり、毎年全国から200点近い応募が寄せられるまでになった。

施設や体制を整備した町は、読書活動の推進に取り組む環境づくりを継続するため、平成26年に「有田川町こころとまちを育む読書活動推進条例」を制定した。また、町民の読書活動の推進に関する施策を実施する責務を明文化、28年には「有田川町絵本まちづくりグランドデザイン」を策定して、「絵本によるまちづくり」の実現に向け歩みを進めた。その活動が評価され、平成30年の第12回高橋松之助記念「文字・活字文化推進大賞」の受賞につながっている。



EHON NO MACHI
ARIBACAHA

絵本のまち
有田川



有田川町絵本コンクール
絵本となった受賞作品。コンクールの優秀作品はデジタル化して電子図書館サービスでの貸出しも行っている。



4 ALECの多目的スペースには、平日でも赤ちゃんからお年寄りまでさまざまな年齢層の住民が集う。奥の「オレンジカフェ」では館内の書籍を持ち込んで、食事をしながら本を読むこともできる。5 JR藤並駅ちいさな駅美術館。町の玄関口である藤並駅に隣接しており、靴を脱いで自由に絵本を読める空間。原画展などの企画も展開できる。6 ポッポ絵本館の壁に描かれた宮西達也氏の作品。杉本さんに絵本の魅力と夢を伝え、絵本のまち有田川のきっかけをつかった宮西氏は、絵本コンクールの審査委員長も務めている。7 児童書に特化しALECとの差別化を図った金屋図書館。8 多くの絵本作家が参加し絵本を身近に感じられるイベント「絵本 de わっしょい」。





1

1 ウォークスルー型図書自動貸出システムの流れ。利用者カードを作成→ 借りたい本を持ってゲートへ→ ゲートを通すだけで貸出し手続完了(写真)。返却したい本は自動返却ポストが利用できる。2 館内の授乳室もウォークスルーシステムと同じデザインに統一。

●「まちづくり」は「人づくり」

ALECでは、令和2年1月、ICタグを活用した日本初の「ウォークスルー型図書自動貸出システム」を稼働させた。利用者が利用者カードと本を持って、ICタグ読取ゲートを通すだけで、貸出手続きが完了するシステムである。「どこの図書館でも図書資料のICタグ化を進めていますが、これを一歩進めて新しい利用者サービスができないかと考え、実証実験を加えると3年ほどの準備期間をかけながら挑戦してみました。今はタグの感知エラーも少なくなり、自動返却ボックスを含め、ほぼ利用者全員がごく当たり前前に利用してくれています」。ゲートのデザインに工夫を凝らしたことも話題づくりに一役買った。

当初7,000冊から始まったALECの蔵書は現在4万冊を超える。収納スペースは少ないが、平成23年11月からは、町村としては全国初の電子図書館システムを導入、住民への貸出しサービスを強化した。絵本によるまちづくりの活動は次第に注目され、ALECには全国から多くの視察者が訪れるようになった。

目の前にある課題を一つひとつ乗り越えてきた成果は着実に評価され、図書館活動の幅は広がってきたが、いまだ正規職員の司書は杉本さんだけだ。図書館の業務や司書という仕事についての役場内での理解がまだ道半ばとの感も否めない。「絵本によるまちづくりを標榜する町が、図書館活動をどのように舵取りしていくのか、しっかり見極めることも必要です。そのためにも、



有田川町地域交流センター
センター長 杉本和子さん
平成7年、司書として旧金屋町の図書室に就職。教員になる夢をあきらめた経験から、子どもたちには夢をあきらめないでほしいと活動を続けている。「出会った人たちの助けがあった今があります」。

2



図書館活動への理解を促す努力と人材の育成に力を入れなければなりません」と表情を引き締めた。

「まちづくり」に必要なのは、未来を見据えた「人づくり」である。こんな話がある。「本を読んでも忘れてしまうのに、なぜ読むの?」と尋ねる子どもに、先生はこう答えた。「毎日何を食べたか忘れても、君は大きくなっているよね」―読書の後に広がるのは、読む前には知らなかった、より豊かで心が揺さぶられる世界だ。人々に本を届け、本を選ぶ楽しみや読む楽しみを伝え、未来への夢をはぐくむ図書館活動は、「人づくり」の根幹を支える、まさに「まちづくり」の第一歩を担っているといえよう。

【取材・写真協力 有田川町地域交流センター(ALEC)】